

日本の学校教育史における感染症と幼児教育 —J.K.U.年報の女性宣教師の記録を手がかりに—

熊田 凡子 (現代教育研究所研究員 江戸川大学メディアコミュニケーション学部)

1. はじめに

2020年、新型コロナウイルス感染症が世界中を襲い、人々の生活様式を変えざるを得ない状況となった。日本では、政府より感染症拡大による「緊急事態宣言」が発令され、学校や企業をはじめ様々な団体の活動、あらゆる営みを一時閉鎖する事態となった。これにより、大学を始め、小・中・高等学校そして幼稚園・保育所及びこども園では、休校、アルコール消毒、日々の検温、マスクの着用、密閉・密接・密集を避ける、さらにサーモグラフィ検査などの感染症予防対策を行う中、教育実践のオンライン化や制限するなど、内容・方法を工夫し運営を展開している。

こうした新型コロナウイルス感染症の影響による教育実態は、これまでにない日本の歴史に残る出来事として、受け止めることができよう。ところが、今までにこのような事態がなかったわけではない。百年ほど前の1918(大正7)年から1920年にかけて、新型コロナに類似する感染症「スペイン風邪」(インフルエンザ)が世界的に大流行していたのである。このスペイン風邪と言われるインフルエンザは、日本においても1918年から約2年間流行し、45万人もが死亡した¹。当時は、他にコレラ、ペスト、チフス、肺結核、天然痘といった疫病にも恐れていた時代である。こうした感染症に向き合いながら生きている時代でも、学校教育は営まれてきた。当時は、いかなる教育を展開していたのであろうか。なかでも、教育の始まり期である幼児教育は、どのような実態であったのか。

そこで、本稿では、日本の幼児教育の普及に影響を及ぼしたと言われる²アメリカ・プロテスタント・女性宣教師らが書き残した年次報告書(J.K.U.年報)にある記録を手がかりに、日本の幼児教育では、感染症にどのように向き合ってきたのか、当時の状況をはじめ、感染症対策や教育方法の実態を明らかにするとともに、そうした実態の記録そのものから、現代の幼児教育に示唆される点を考察することを目的とする。

本稿は、保健学及び公衆衛生学の領域で感染症を史学追究するものではなく、あくまで学校教育史の中で、幼稚園に携わる教師たちの実際の記録に基づき、教育と感染症の歴史の変遷を確認し、感染症と共に生きる現代の教育において重視すべきことを考えてみたい。

2. 本研究の史料—J.K.U.年報について

本稿では、日本の幼児教育の感染症に関する史料として、主にJ.K.U.年報にあるアメリカ・プロテスタント・女性宣教師の報告書を使用することにする。

なぜなら、学校教育史関連の各学校史及び幼稚園史、地域教育年史等においては、感染症に関する事象の記述が極めて少なく、具体的な実態を見出すことができない。また、保育史研究で扱われている日誌等の記録では、当時の保育の内容・項目を記載する記述に留まっている³。一方、今回取り上げる女性宣教師の記録は、学校教育や宣教活動報告に加え、地域の様子や人々との交流、地域の健康

推進や衛生問題等の状況、地域の文化や商業、工業等に関する事項等、幅広い視点で綴っているため、当時なされていた教育が地域に与えた影響やその実態を詳細に分析できると考えられるのである。そうした点については、先行研究でも指摘されている⁴。つまり、J.K.U.年報は、1907年から1939年まで日本各地で活動していたJ.K.U.に属する各幼稚園の様子に限らず、地域や社会の実態が示されている資料と言える。

日本の幼児教育は、東京女子師範学校附属幼稚園（1876年）に始まり、官立の模範幼稚園、簡易幼稚園を展開させ、その後、「幼稚園保育及び設備規定」（1899年）制定後、官立、私立の幼稚園が全国規模で普及した。私立幼稚園であるキリスト教主義幼稚園では桜井女学校附属幼稚園（1880年）、英和幼稚園（1886年）などが設立され、1900年では私立幼稚園の約3割がJ.K.U.加盟のキリスト教主義幼稚園であった⁵。その後も、J.K.U.に属するキリスト教主義幼稚園が増加し、日本の幼児教育の発展に影響を与えていたのである。すなわち、J.K.U.年報の内容を詳細に分析することで、日本各地における幼児教育の当時の実態や具体的な取り組み等、特に本稿の目的である感染症に関する健康・衛生問題の実情の一手がかりとなり本史料を扱う意義があると考えられるのである。

ここで、J.K.U.年報について、概要を述べておく。

まず、J.K.U.とは、1906年、教会や学校に付設されたキリスト教幼児教育施設の教育充実のために、キリスト教幼児教育に関っていた外国人女性宣教師らが軽井沢で立ち上げた協議会組織 **Japan Kindergarten Union** を指す⁶。現在のキリスト教保育連盟の前身である。初代会長は、頌栄保育伝習所と頌栄幼稚園（1889年、現・頌栄短期大学、附属幼稚園）を創設したA.L.ハウである。

J.K.U.の目的は、主に「幼い子どものための仕事を効果的に進めるため、在日外国人保育者が相互に話し合い、連携し合う」ことであり、毎年夏に軽井沢のユニオン・チャーチを会場に定例集会、研究協議を行い、英文の年報（**Annual Report of the Kindergarten Union of Japan**）を発行した。この年報（英文）が本稿で取り扱う史料で、筆者が訳して分析に扱っている⁷。年報では、保育者は保育の実際面だけでなく、これを支えるより高い教養を絶えず学んでいたことが、記録に残されており、女性宣教師らは、質の高い保育者を養成し、世に送り出すことを重視していたことが分かる史料でもある⁸。さらに、1915年には、日本の各地域でJ.K.U.支部会（12支部）を結成するなど、J.K.U.の活動は全国区で展開させたのである。

表1は、J.K.U.年次集会で研究協議し学んでいたテーマについて、一覧にまとめたものである。

表1の1911年の事項にあるように、J.K.U.の各幼稚園における「母の会」（太字ゴシック体は筆者による）の取り組み中で、病気の話題が挙げられていたことが分かる。幼稚園と家庭との繋がりを重視した取り組みが、感染症の対応の一つであったと考えられるため、詳しくは史料に基づき後述する。

また、1922年頃から、子どもの健康についての話題（太字下線は筆者による）が頻繁にテーマとなっていることが分かる。この点についても、史料である各幼稚園のレポートから当時の時代的背景も含めて確認することにしたい。

ここで、日本の幼稚園教育史における感染症の対応や健康に関する活動の位置づけについて、その変遷を確認しておきたい。

表1・J.K.U.年報年次報告事項

西暦	年次報告主要事項
1907	J.K.U.の規約、フレーベルの『母の遊戯』、教育の歴史、遊びの研究・健康促進他
1908	日本の幼稚園、私たちのなすべき仕事、政府のルール、運営費、他
1909	幼稚園での行事（祝う祭り）、私の体験した幼稚園の同窓会、日本伝道のために私たちの幼稚園は何をしているか他
1910	フレーベルと幼稚園の歴史、歌・ゲーム・行事、他
1911	フレーベルの『母の遊戯』幼稚園の保育計画、母の会（結核治療、出生前の病気の影響）、幼稚園のプログラム、幼稚園での図画、自由な切り紙
1912	遊びとゲームの教育的価値、日本帝国の家族の悲しみ、福音伝道をしたみた幼稚園
1913	日本における私たち幼稚園の使命、ゲームにおける私たちの問題
1914	母の会、子どもの仕事、アメリカでのモンテッソーリーメソッド（導入）、ローマの「子どもの家」訪問
1915	幼稚園の活動と保育教材、幼稚園における実際的な問題（教師の不安）、禁酒法
1916	J.K.U.10年の歩み、愛国心教育、園児数と保育料、園児の作品をいかに役立たせるか
1917	幼稚園に使用する日本家屋、幼稚園のスケジュール、幼稚園での子どもの自然研究
1918	遊び—精神発達におけるその役割、音楽・リズム、フランスへの働きかけ、教員養成に何を望むか
1919	幼稚園の庭、自然研究、幼稚園におけるゲームの役割と目的、歌の本、欠陥のある子ども、お話について
1920	自然研究、自然の作業テーマを継続する、幼稚園における色、保母と母親の信条
1921	幼稚園児のための自然研究、歌の本、養成学校における実習及び観察、伝道機関としての幼稚園、幼稚園教員の有効な時間の使い方
1922	幼稚園の監督者の重要性、自然研究、日本の子どもの遊びの研究の指導原理、 <u>子どもの生活・健康についての質問と提案</u> 、幼稚園で使用される教材、幼稚園卒園生の活動
1923	幼稚園の <u>子どもの健康の研究</u> —病気の子どもの死亡率が高いが、東京市民の関心が低い（関東大震災前の記録）、子どもの死亡率（1位大阪堺、2位小樽、京都、神戸、東京、横浜と名古屋）、幼稚園での種まき
1924	病気の子どもたち、震災のこと、 <u>幼稚園での健康と遊び</u> 、幼稚園での讚美歌の生かし方、 <u>子どもの健康のための報告</u> —家庭生活・睡眠・食事、子どもの健康相談、栄養食品の配布
1925	<u>健康ポスター</u> 、 <u>健康の本</u> 、幼稚園での性格形成、知能テスト
1926	今年のテーマは <u>健康</u> 、 <u>健康生活</u> に関するレポート
1927	教育・宗教・社会、保育内容に関するシンポジウム
1928	今年のテーマは幼稚園のキャラクタービルディング、音楽と自然、ナースリー・スクールの学び
1929	第1回日本キリスト教保育者全国大会、幼稚園のコミュニティへの影響、 <u>幼稚園と家庭</u>
1930	日本時保母の横顔—和久山キツ、功刀嘉子、増田たか、 <u>子どもたちの健康を推進する実践的な提案</u>
1931	両親教育、両親教育と卒業生へのフォローアップ、母の会（宗教、 <u>医師や歯科医による健康会議</u> 、専門家による育児と訓練、病気の予防、適切な食物と衣服、病気とその治療）
1932	日本キリスト教保育連盟、近江兄弟社清友園の健康生活（健康と清潔さの朝の検査、野菜の摂取、昼寝、昼食前の手洗い、てぬぐいの使用、食後に歯を磨く衛生的な習慣、うがい、発熱、ひどい風邪や伝染病の症状が出た場合帰宅する、 <u>予防法を学ぶ、家庭との間で交換レポート</u> など）、今年のテーマ「1人1人の子ども」、フレーベルの母の遊戯
1933	
1934	精神的発達、社会奉仕、教育、 <u>健康</u> 、家庭との連携、同窓生との連絡、困難に打ち勝つ
1935	
1936	キリスト教幼稚園発展の半世紀、ナースリー・スクール（功刀嘉子）、
1937	
1938	J.K.U.と保育連盟
1939	

備考・表1は、筆者熊田凡子が、J.K.U.年報にある年次報告事項のレポート・協議内容のテーマを抜粋して表にまとめた。

3. 幼稚園史における子どもの健康及び感染症とその対応

日本の幼稚園創始期は、学制（1872（明治5）年）の中で幼児のための教育施設の幼稚小学という名称で制度化され、幼児教育における諸規則（健康保全に関して）は、小学校令施行規則（1900年）で「幼児ヲ保育スルニハ其ノ身心ヲシテ健全ニ発達セシメ善良ナル習慣ヲ得シメ以テ家庭教育ヲ補ハンコトヲ要ス」と示されるまで、各幼稚園の規則の中で位置づけていた⁹。例えば、東京女子師範附属幼稚園（1876年創設）の翌年の規則によれば、「幼稚園の目的は『学齡未滿ノ小兒ヲシテ天賦ノ知覺ヲ関連シ固有ノ心思ヲ啓發シ身体ノ健全ヲ滋補シ交際ノ情誼ヲ曉知シ善良ノ言行ヲ慣熟セシムル』¹⁰とし、幼児教育においては、身体の健全を養い保つことを基本的な目的にしていた。また、東京女子師範学校附属幼稚園に倣い開設された幼稚園の大阪府立模範幼稚園（1879年）の開設には、「幼児ノ家ニ在ル多クハ悪戯飽食食習ヒ性ナリ、却テ脆弱ナル身心ヲ損スル等此々是ナリ」¹¹とし、家にある幼児は、悪戯飽食が習慣となって心身の健康を損なっている者が多く、母親はたとえ保育法を知っていたとしても、家事に追われ、育児に専念することができない状況にあることから、母親に代って適切な保育を行うという意図があった。さらに、1880年に文部省より奨励された、貧民層の幼児の保護と習慣形成を目的とする簡易幼稚園でも同様に、幼児の悪習の伝染や父母の間違った保育から遠ざける意味において営まれ、貧民幼稚園のモデルとして女子師範学校附属幼稚園分室（1892年）を設置し保育法を研究してきた¹²、といった日本の幼児教育の流れがある。つまり、日本における幼児教育では、幼稚園草創期から、幼児の心身の健康を養い保つことで家庭での保育を補う視点があったということである。後に至る幼稚園令（1926（大正15）年）では、「幼児ヲ保育スルニハ其ノ身心ヲシテ健全ニ発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ家庭教育ヲ補ハンコトヲ要ス」と「善良なる性情を涵養」すると改め人間性の基礎を培う点を主張するものの、健全な発達を保つ視点は継続されてきたと言える。

その後の1929（昭和4）年、学校医、幼稚園医及青年訓練所医令が施行されている。つまり、幼稚園に、小学校以上の学校における学校医同様、幼稚園での衛生に関する職務に当たる幼稚園医が置かれることになったのである。それは、幼児期が身体的に保護を要する時期であること、幼稚園は幼弱な幼児が病菌の伝染を被る危険なところと医師から危惧されていることなどの理由によるものであった。さらに、1931（昭和6）年、学校歯科医及幼稚園歯科医令が施行される。これらにより、1940（昭和15）年度において医師は1園当たり1.21人が置かれた状況となった¹³。

この幼稚園医設置に至る展開は、法令が先導したというよりも、実際に幼児の病菌の伝染による状況があったためではないかと考えられる。しかし、幼児教育の歴史の中で、幼児の疫病等に関する事項については、ほとんど触れられず、具体的な実態は明らかにされてこなかった。東京女子師範学校附属幼稚園の分室の保姆の手記「東京女子高等師範学校附属幼稚園分室ニ関スル事」（1925年）¹⁴によれば、「毎朝児等の体容に注意し、衣服を整へ顔面手足を清くし、然る後必らず修身行儀等に関する悦話をなし、其の間は一層姿勢に注意し、専ら怠惰の風を避けしむ。」とあるように、幼児の健康状態、清潔、行動に留意して保育が行われ、秩序や規律正しさを養うことを重視していたことが確認できる程度である。

以上のように、詳しい実態は確認できないが、幼稚園医が設置されるまでの幼稚園教育では、幼児の健康や清潔等を意識した実践がされていたことがうかがえる。

一方で、J.K.U.の活動（表1）では、健康、衛生に関する活動を先駆的に展開していたことが分かる。例えば、大阪のランバス女学院附属幼稚園（1891年、前・広島女学校附属幼稚園、後の聖和女子学院附属幼稚園、現・関西学院幼稚園）は、幼稚園の「母の会」を発展させ、週に1度、衣服・食物・衛生等を基本的に教える「母親学校」（1923年）を行っている¹⁵。そうした実態を本稿で取り上げる史料から読み取ることができる。なぜそういった取り組みに至ったのか、いかなる感染症が流行していたのか等、次に、詳しく実態を確認していくことにしたい。

4. J.K.U.の記録に見る感染症の状況（幼稚園の実態）

まず、J.K.U.年報にある各幼稚園の女性宣教師のレポートの記述内容より、病気や感染症の名称、健康活動や病気予防などに関するキーワードを抜粋し、1907年から1939年の日本各地の状況として表2の一覧に示してみた（病名及び病気の文字を太字ゴシック、母の会を囲みは筆者による）。

4-1. 幼稚園における感染症の状況

表2にある各幼稚園の報告は、大半が前年度を振り返り提出されているものである。次に取り上げる記録は、その中の一部であるが、コレラ、赤痢、水痘、はしか、百日咳、おたふく風邪、腸チフス、疫痢、結核、そしてインフルエンザといった病名が記されている。（J.K.U.年報号及び園名と発行年度を記載。年報（英文）の訳及び下線は筆者による。）

佐賀幼稚園は、毎年平均30人の園児数を保持しています。市内では赤痢が流行したが、この1年で、園児数の増加の目標を果たすことができ、園児の出席は継続しています。教師は3人から2人に減少し、母の会は病気の人がいたために不定期に行いました。（第4号：Saga Kindergarten and Branches. 1910）

春期に、はしかと百日咳が私たちに襲いましたが、前の年ほどではありませんでした。そして保育が少し中断されたが、それは私たちが恐れたほど深刻ではありませんでした。（第7号：Tokiwa Kindergarten-Hamamatsu. 1913）

今年の春には市内で流行した腸チフスによって、園児の出席が減少した。（第8号：Hirosaki Kindergartens. 1914）

恐ろしい病気「疫痢」は、浜松で特に流行しているので、6月の会では、専門医が疫痢のこととそれと同じ系統の病気について母親に講演するために招待されました。（第9号：Tokiwa Kindergarten, Hamamatsu. 1915）

（昨年）全体として良い年でした。秋の初めには、コレラの恐怖のために子どもの数は減りましたが、病気になることはなく、1日も幼稚園を休園にする必要はありませんでした。（第11号：Tsukijima Kindergarten. 1917）

記録によれば、感染症の流行によって、「母の会が不定期になる」「保育を中断（休園）する」「園児が減少した」とあるように、感染症が幼稚園の運営に何らかの影響を及ぼしたことが分かる。また、一方で、感染症が地域に流行していたが影響がなく、休園せず卒園児を送り出したなどの記録も

ある。さらに、はしかと百日咳が流行し幼稚園での蔓延が非難される（1916年、滋賀・ぜぜ幼稚園）場合もあるため、園児の流行を防ぐことに努めていた。いずれも女性宣教師が一年を振り返り、園の運営状況や園児数の増減を意識した報告である。その上で、当時流行した感染症などの地域の状況を述べている。女性宣教師が自身の宣教及び教育活動報告を誇張するために、当時の困難な事情を記した可能性はあるかもしれないが、いずれにおいても幼稚園やその地域の日常に感染症があったことが分かる。

また、1907年の善隣幼稚園（神戸）の報告はコレラとペストの流行に触れており、当時、神戸地域で流行していたことが推察できる。J.K.U.設立以前のことについては、他の宣教師レポートより、現存する最古のキリスト教主義幼稚園である英和幼稚園（史料では金沢女学校、現・北陸学院幼稚園）の設立1886年当初、コレラが大阪と京都で蔓延していたことが記録から確認できる¹⁶。つまり、日本の幼児教育は、草創期より感染症と向き合う中で継続発展してきたということである。

4-2. インフルエンザの影響

また、表2の1919年から1921年の報告にあるインフルエンザとは、世界中で蔓延したスペイン風邪のことである。J.K.U.年報では前年度の事項が報告されているため、インフルエンザは1918年から1920年に流行していたことが分かる。表2によれば、関東・東北・関西地域で、特に1920年の記録、実際は1919年に神戸、大阪、京都で流行していたことが確認できる。詳しくは以下の報告にある。

昨年、大阪でインフルエンザが猛威を振るっている間、市の規程により幼稚園を2週間閉鎖しました。子どもたちの家族の病気とインフルエンザにかかることの恐怖のために、私たちの園児の何人かは4月1日まで学校を休みました。しかし、21人の生徒がこの幼稚園のコースをすばらしい成長で終えることができました。（第14号：The Kizukawa Day Nursery, Osaka, 1920）

インフルエンザ：12月が終わり、記憶に残る忘れられない今年の出来事は、インフルエンザのことで、とても明るい3人の先輩（伝習所の女学生）がそれぞれ12月の5日の内に亡くなってしまったという、悲しみに包まれたことです。

私たちは、クリスマスのお祝いの代わりに、私たちのプレイルームで3人の葬儀をしました。30年間ではじめて、新年に私たちの園は閉鎖し、幼稚園は12月18日から2月2日まで閉鎖されました。（第14号：Glory Kindergarten Training School, Kobe, 1920）¹⁷

今年の同窓会はとても活発にすると約束しましたが、病気がやってきて、また1920年の記念日に代表でスピーチをした子がインフルエンザで亡くなりましたので、春からは、病気の子どもたちのためにスクラップブックを作るための小さな会議が数回しかありませんでした。（第15号：Ascension Kindergarten, Kobe, 1921）

上記の記録より、当時のインフルエンザ感染防止の対策で、大阪では市の規程により幼稚園を2週間閉鎖、神戸では開園してから初めて休園の措置をしたこと、また実際に関わりのある子どもや女学生がインフルエンザで死亡したという実態を確認することができる。

4-3. 感染症に対する園の取り組み

J.K.U.では、ただ休園の措置に拠るだけでなく、各園が開園時から設けている営みの一つに「母の会」(mother's meeting)があった。母の会では、園と家庭が共に子どもの育児に向き合い、また病気など当時の問題について学ぶ機会があったことが史料から確認できる。

夏の月に、私たちの3人の子どもたちが「赤痢」で亡くなりました。教会の牧師はこの悲しい体験を契機に特別な礼拝を計画し、天国での慰めの説教をしました。次回の母の会で、医師に子どもの病気とそのケアについて話してもらいたいと願う。(第12号: Zeze Seiai Youchien, 1918)

各園の母の会は、医師の講演や健康・衛生推進の取り組みを試行していた。詳しくは後述する。

表2・各園の報告(病気・感染症関連)

西暦	各園の報告: 病気・感染症関連事項(地域・園名)
1907	コレラとペストの流行(神戸・善隣)、 <u>母の会</u> —衛生と病気のケアに関する医師の講座(秋田)
1908	歌・リズム・物語・色・仕事・遊び・自然との生活・秩序・清潔さ・毎日の祈り(頌栄・神戸)
1909	清潔さを教える(善隣・あいか)、 <u>母の会</u> —教師・医師・牧師の話(佐賀)
1910	市内で赤痢流行(佐賀)、水痘とはしかの流行(川越)、最も清潔と園の評判(仙台)、風通し湿度の工夫(下関)
1911	<u>母の会</u> —子どもの性質・健康・公衆衛生(かきわ)
1912	伝染病の問題、初期の兆候、詳細な注意を(頌栄幼稚園・保姆伝習所)、病気で亡くなる少女の話(浜松・東洋英和)
1913	タバコは弱い体を作る(ルーテルおぎ)、春期にはしかと百日咳が襲い中断した(浜松・ときわ)
1914	今年の春に市内で流行した腸チフス(弘前)、病気で卒園欠席、母の会教師・牧師・医師による話(大阪・天王寺)
1915	病気はなく過ごす(名古屋・かきわ)、恐ろしい病気の疫癘が蔓延(浜松・かきわ)、子どもたちの間で大きな病気(築地)、多くの病気がある中(深川)、何人かの子どもが病気で亡くなる(名古屋・モーニングスター)、百日咳とはしか流行し、子どもたちが園から遠ざかる。教師は病気の子どもを訪ねる(神戸・二宮)
1916	春休み中2人の死者が出たが病気はほとんどなかった(名古屋・ときわ)、4月以降はしかの流行があり、出席減少(松本)、皮膚病のない清潔ルールに準拠した子ども(スターライト)、健康に役立つ子供服の変化(名古屋・モーニングスター)はしかと百日咳の流行し幼稚園での蔓延が非難される(滋賀・ぜぜ)
1917	多くの園児が病気(原宿)、メディカルレクチャー(神戸・善隣) コレラの恐怖(東京・月島) 昨年コレラの恐怖(金沢女学校)、生徒の1人が病気であったが、清潔・健康的を保つ(仙台・師範)、はしかと百日咳(北海道・小樽)、はしか流行、 <u>母の会</u> 医者の講演(東京・啓蒙)、病気の男児(津たまき)、昨年コレラとはしか(渋谷)
1918	ヘッドティーチャーの深刻な病気(深川)、1917年4月はしかの流行(小石川)、医師や歯科医の講演(東京・まさき)、教師の病気が続く(金沢)、子どもたちははしか・百日咳・風邪に苦しみ、教師はおたふく風邪(小樽・ローズ)
1919	1919年冬の始めインフルエンザ流行(桜井育成)、1918年秋にインフルエンザ春には火事の危機(仙台)、栄養不足の子ども(名古屋・柳城)、非常に悪いタイプのはしか(上田)、赤痢で園児3名死亡(滋賀・ぜぜ聖愛)他 <u>母の会</u> 子どもの病気とケア
1920	インフルエンザによる休園などインフルエンザに関する事項6件(大阪、きず川、神戸西宮、神戸頌栄他)、ヘッドティーチャーの腸チフス(鳥取・愛真)、深刻な病気(名古屋・柳城)、医師の講演会(小樽・ローズ)
1921	同窓会で1920年記念日に代表スピーチした子がインフルエンザで死す(神戸)、ヘッドティーチャーが長い病気(静岡)、教師の間で奇妙な病気(博多)

1922	1921年10月近畿支部で <u>結核予防・幼児の健康講義、健康と清潔のプログラム</u> ・月2回医師の検診・流行病予防などに関する事項10件(秋田、金沢双葉、大阪ランバス女学院、二宮他)
1923	<u>母の会</u> —治療法、健康的な子どもになるために講演、無料の診療所(大阪・愛隣)、クリニックの先生の話(富山・青葉)、 <u>クリスチャンではない担当医2人</u> (金沢)、 <u>家庭でのよい健康習慣</u> (静岡英和)、 <u>担当医から子どもの弱さを教えてもらう</u> (金沢・双葉)、 <u>園医の身体検査・健康診断の話</u> —扁桃腺の拡大・アデノイドなど(京都・平安)
1924	<u>病気による欠席</u> (長野・あさひ)、 <u>医師のフォーラム「目耳鼻咽喉歯のケア」</u> (大阪)、 <u>医師と看護師と接続し健康プロジェクト</u> 、他地震に関する報告10件
1925	4人の教師の重い病気、 <u>母の会</u> —健康に関する医師の話や料理と裁縫のクラス(静岡)、 <u>入浴と歯磨き</u> (京都・聖公会)、 <u>健康診断</u> (福井)、 <u>健康状態良好の報告</u> (東洋英和・静岡英和)、 <u>園医を持ち、4半期に1度身体検査を行い子どもの健康のための正しい提案を保護者に</u> (大阪ランバス女学院)、 <u>目の検査</u> (松山)、 <u>身体検査</u> (名古屋柳城)
1926	衛生学を学ぶ(仙台部会)、 <u>写真：手洗いの方法</u> (京都・平安)・(名古屋・清水)、 <u>母の会</u> — <u>出生前の影響</u> (富山・青葉)、 <u>2歳未満の検診の話</u> (東京)
1927	<u>家庭で牛乳を拒む子が幼稚園では飲むこと・病気の子どものことを祈ること</u> ・ <u>写真：月1回子どもたちの健診</u> (大阪ランバス女学院)、 <u>衛生学で必要なコース・乳幼児の身体的ケアの意義をカリキュラムに追加する必要がある</u> (頌栄保姆伝習所)
1928	<u>写真による報告</u> (戸外遊び、室内遊び、宗教教育、子どもの仕事、 <u>健康教育</u>)
1929	<u>病気と信仰(祈り)</u> (小樽・ローズ、金沢、神戸・二宮)、 <u>健康教育</u> (金沢女学校附属)(京都・今出川)の報告
1930	<u>身体検査と健康対策</u> (神戸・頌栄幼稚園)、 <u>栄養教師との健康促進の取り組み</u> (大阪ランバス女学院)、 <u>身体的活動と健康訓練</u> (名古屋・柳城)
1931	<u>牛乳を出す事、ランチプラン、子どもの身体的ケア</u> (小浜・舞鶴)
1932	<u>健康支援のため教師が子どもと一緒に病院へ通う、日光治療</u> (名古屋)、 <u>日光浴・午睡</u> (石川・羽咋)、 <u>医師の診察年1回、野菜スープ</u> (浜松)、 <u>健康習慣</u> (福井・聖三一)、 <u>服を着る方法のポスター</u> (名古屋)、 <u>園医はいないが母の会で健康の話し合いを持つ</u> (スターライト)、 <u>栄養士による子どもの昼食</u> (ランバス女学院)、1932年1月に引越し日光の入る部屋(東洋英和幼稚園)
1933	
1934	<u>健康に関する報告</u> — <u>粉石鹸の使用、鼻の習慣、牛乳、昼寝、日光浴</u>
1935	
1936	<u>お昼寝、戸外遊びの写真</u>
1937	
1938	J.K.U.と保育連盟との合同の議事録他
1939	

備考・JKU.年報の各幼稚園の報告書より、病気・感染症に関する報告内容の、キーワードを抜粋し、地域と園名は確認できる範囲で記載し、筆者熊田凡子がまとめた。

5. 女性宣教師による健康活動と衛生対策

J.K.U.の活動では、組織当初から母の会での医師による病気に関する講演、料理や裁縫教室などを行っており、またインフルエンザの流行以降は、健康活動や衛生指導を推進していったことが、表1・表2より確認できる。そこで、具体的な内容について史料を提示する。

5-1. 子どもへの指導

まず、幼稚園の活動では、例えば表1の近江兄弟社清友園(1932年の報告)にあるように、「健康と清潔さの朝の検査」「野菜の摂取」「昼寝」「昼食前の手洗い」「てぬぐいの使用」「食後に歯を磨く衛生的な習慣」「うがい」「発熱、ひどい風邪や伝染病の症状が出た場合帰宅する」「病気の予防法を学ぶ」「家庭との間で交換レポート」を行っていた。

また、1926年報告「手洗いの方法」(京都・平安幼稚園)では、図1「Cleanliness is next to godliness」にあるように、清潔を敬虔と同じように重要視し、1人1人の子どもに洗面器を用意して手洗いの指導を行っていた。

昨年の平安幼稚園は、健康管理について特別な努力をしてきましたが、これまで行われてきたことはほんの小さなことであり、種が蒔かれ、今では少なくとも子どもたちは自分のために簡単なことのいくつかを行う方法を知っています。同封の写真は、手洗いと顔洗いのレッスンです。(第20号：Heian Kindergarten, Kyoto, 1926)



Heian Kindergarten, Kyoto.
Cleanliness is next to godliness.

図1・手洗いの方法

この手洗いの方法の健康・衛生に関する教育実践(実際は1925年)は、他の地域でも「This is way we wash our hands. (Shimizu Kindergarten, Nagoya)」(これは、私たちの手を洗う方法です。)と手洗い指導の写真が残されており、広く展開していたことが分かる。

5-2. 医師による健康診断

また、日本における幼稚園では、1929年に園医の設置が制度化されたが、J.K.U.加盟の幼稚園では、すでに、1922年の時点で園医による検診や指導を行っていた。そのことが史料より確認できる。

秋田幼稚園の私たちが試みた健康診断は、非常に実用的な方法で地域社会を助ける可能性があり、役立つ情報を収集したいと考えています。入園時に私たちは58人の子どもたちを健診しました。(第16号：Akita Kindergarten, 1922)

昨年の成功した事の一つは、1921年12月の児童福祉活動の組織でした。クリスチャンの医師が、1か月に2日間、小さな子どもを持つ母親のために診療の機会を与え、ランバスの教師は教育的または宗教的な問題に関心のある母親の相談に応じます。(第16号：Lambuth Jo Gakuin Kindergarten, Osaka, 1922)



Getting the doctor's help, with mother and teachers
at the medical Clinic.

Lambuth Jo Gakuin Kindergarten, Osaka.

図2・健康診断

このように健康診断が行われ、また、健康診断は幼稚園の子どもだけではなく、地域の親子に対しても診察を行い、幼稚園が地域に対して健康・衛生に関する支援を行う役割を担っていた。他にも「母の会の後援の下、各幼稚園で成功したベターベビーデーを開催し、クリスチャンでない医師2名と看護婦が無料の診察サービスを提供してくれた」(第16号：Kanazawa Kindergarten, Kanazawa, 1922)といった記録もあり、幼稚園の健康診断を母の会が支えていたことや、幼稚園教師と母親が協力して共に考え研究して解決をはかる衣服食物衛生等の教育活動「母親学校」開設などに発展させた

ことなど、J.K.U.の中で幼稚園の健康・衛生管理の取り組みが推進されてきたと言える。

これらの園医による健康診断は、「子どもたちが悲鳴を上げて泣く場合もあるが、身体検査はとても意味のある仕事であり、小学校に入るまでに、子どもたちの健康促進と改善のために重要であること」(第16号：Heian Kindergarten, Kyoto. 1922)を示してきたのである。

5- 3. 生活の工夫 (食育活動・地域性)

また、幼稚園によっては、子どもの興味や意欲を活かした食事に関する推進活動や、地域の特性が表れている取り組みなど、子どもの健康な体を育む教育実践を取り入れて展開させている。

週に1回、子どもたちに昼食のご飯だけを持参させました。その日、幼稚園で野菜を調理し子どもたちに好きなだけ与えました。ほうれん草などの野菜に触る習慣がなかったので、幼稚園で一緒に作って調理するという特別さから、意外によく食べていました。家でほうれん草を食べたことのなかった女の子が家に帰って母親に先生から教えてもらった作り方を伝えて頼んで家でも食べました。(第22号：Imadegawa Kindergarten, Kyoto. 1928)

このように、食事については、実際の野菜に触れ調理し、子どもたちが「特別さから、意外によく食べる」という取り組みがなされ、「家に帰って母親に先生から教えてもらった作り方を伝え」というように、幼稚園の教師が家庭での子どもの様子を共有していたことが分かる。さらに、適切な食事の在り方や生活の仕方を指導し、工夫しながら健康推進活動が行われていた。

先生たちは健康について話し合ってきた。適切な食べ物を食べる、顔を洗う、歯を磨く、日差しの中で遊ぶ、健康列車に乗って8時に寝る絵を壁に飾りました。ある日、エミちゃんの父親が食事前にケーキを出したが、エミちゃんは「いやいや、これを食べると健康列車に乗れなくなるよ」と拒否しました。

夏の間の3週間、特別な「太陽の学校」を開催しました。宗教教育と健康活動が特徴でした。歌、賛美歌、戸外遊び、大学の医師の下による日光浴、乾布摩擦、牛乳の提供、静かに遊ぶ時間などのプログラムでした。(第22号：Kanazawa Hokuriku Jo Gakko Kindertens. 1928)¹⁸



Kanazawa Hokuriku Jo Gakko Kindergarten, Sunshine School.

図3・太陽の学校・日光浴

上記の幼稚園生活の中では、子どもが健康に過ごして「健康列車」(a health train)に乗るといった食事に関する意識や生活の仕方を促す指導がされていた。また、日照が不足する西日本の日本海側の北陸地域では、写真「太陽の学校」(Sunshine school)といった日光浴を重視した健康活動を実践するなど、生活の工夫を行っている。こうした活動は、その後北陸地域の各幼稚園で展開され、その様子(日光浴・午睡(第26号：Sun-bath in the Hakui Kindergarten-Ishikawa ken. 1932)が残されている。

このような幼稚園における健康推進活動、衛生の指導でも、常に「母の会」と連携し家庭と共に取り組んできたのである。

5-4. 家庭（母の会）との連携

J.K.U.の園では、幼児教育を通して家庭との密接な連携を図り、育児や生活改善に関する講演や話し合いを行うことで、母親が子どもにより正しい理解と幼稚園の保育に関心を持ち、さらにキリスト教信仰の理解に至ることを目的に「母の会」が組織されていた¹⁹。

「母の会」の内容は、表1にあるように、J.K.U.の年次テーマ（第5号：1911年）でも取り上げられ、日本各地の幼稚園で共有していたことが分かる。具体的な活動は、表2の母の会で行われていた事項（下線部）より確認できる。例えば、1923年の記録にある「母の会」（第17号：実際には1922年の取り組み）では、「治療法、健康的な子どもになるために講演、無料の診療所」「クリニックの先生の話」「クリスチャンではない担当医2人」「家庭でのよい健康習慣」「担当医から子どもの弱さを教えてもらう」「園医の身体検査・健康診断の話扁桃腺の拡大・アデノイド」とあるように、「母の会」が健康・衛生に関する取り組みを進展させてきたとも言えるであろう。さらに、家庭訪問、交換レポートや園児の観察カード（発達の様子を伝える）のやりとりを積極的に行っていたことも報告に残されている。この「母の会」は、当時の母親の生き方、家庭の在り方の改善を考える期待できるものであった。

6. まとめ

本稿では、日本の歴史の中で、幼稚園に携わる教師や母親たちが感染症とどのように向き合い教育を展開させていたのか、史料の分析により実態を明らかにした。病気の感染経路については確認できない点があるが、当時の教師の姿勢や幼稚園の対応を史料から読み取ることができたのは、主に次の4点である。

第一に、感染症は常に園生活の日常に存在していたという点である。コレラ、赤痢、水痘、はしか、百日咳、おたふく風邪、腸チフス、疫痢、結核、インフルエンザの流行が、直接影響した場合、影響しなかった場合でも、地域に蔓延した感染症であったことを記録の中で触れていた。そうした状況でも園児の成長や園を運営している喜びを報告していた。

第二に、感染症の拡大により、園の休園等の措置がされていたという点である。感染症が幼稚園で蔓延をすることや園児の感染を防ぐための対応を行っていた。

第三に、幼稚園の中で、生活や遊びの工夫を行い、健康推進、衛生指導などの教育実践がされていた点である。「手洗いの方法」「野菜の調理」「健康列車」や「日光浴」などの工夫した取り組みを行い、また園での「健康診断」は地域を支える健康推進活動として貢献していた。

第四に、J.K.U.の幼稚園では、常に園と家庭が連携していたという点である。幼稚園と家庭が繋がりに子どもの育ちについて考え合う組織「母の会」で情報を共有していた。

こうした点を、現代の幼児教育で保ち続けているだろうか。感染症予防を重視した対策、特に形式に準じた教育配慮になりがちではなかろうか。子どもの自らの健康意識の推進や実際の生活指導、保護者との共通理解、健康診断や連絡帳の在り方を見つめ直してみたいものである。単なる伝達ではない保護者と地域と支え合う教師の視点に立ち止まるべきではないだろうか。

その他、本稿で使用した史料は、女性宣教師が関東大震災、米騒動、洪水、大雪、天皇死去など、

日本の社会事象を丁寧に記載し、子どもや母親の固有名詞を用いたエピソードを残している点が見られることも特徴的であった。その点は、今後幼児教育の実態史研究の活用にも期待できるものである。

本稿では、J.K.U.年報にある記録を用いて、日本の各地域の感染症の状況や対応についての一模様を把握するために分析を行ったが、同様に日本各地にある他の幼稚園の日記等においても幼児の病気に関する事項が書かれていた可能性があると考えられるため、そうした史料発掘については今後の課題である。

付記・本稿は、J.K.U.年報の分析の際に、2020年度キリスト教学校教育振興助成（キリスト教学校教育同盟）「キリスト教学校における米国長老教会女性宣教師の教育活動の史料分類及び史料的価値に関する研究」（研究代表者・熊田凡子）採択による調査資料の一部を使用している。

註

- 1 速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』藤原書店、2006年、99-104頁、239-241頁。
- 2 小林恵子『日本の幼児保育につくした宣教師—上巻—』キリスト教新聞社、2003年・永井優美『近代日本保育者養成史の研究—キリスト教系保姆養成機関を中心に』、風間書房、2016年・熊田凡子「北陸地域に女性宣教師の果たした役割」『キリスト教史学』第73集、キリスト教史学会、2019年などでは、日本における幼児教育の普及及び発展に果たしたアメリカ・プロテスタント女性宣教師の役割について述べている。
- 3 例えば倉橋惣三・新庄よし子『日本幼稚園史』臨川書店、1956年の保育の実状では、「幼児に登園すれば必ず附添と共にまづ監事の室に入り、朝の挨拶をすませた上で夫れぞれの開誘室に入る。朝の遊戯室の集りは、…（後略）」（159-160頁）といった一日の保育の流れ、また「幼児も同じく手拍子を自分でうち乍ら唱つてゐたのであるが、用ひて居た笏拍子といういふものはもと／＼表紙をとるだけに使ふのであるから、初めの聲の出が高いと、段々調子の高い歌になつてしまひ…（後略）」（268頁）などの保育の内容や活動の様子を記す程度で、当時の地域の実情や個々人の内面に触れた記述は見られない。
- 4 女性宣教師の記録は、地域の情景や出会った人々1人1人の思いや考えなど、詳細にエピソードで表している特徴がある。（熊田凡子・辻直人「米国長老教会宣教師アイリン・ライザーのキリスト教教育観—戦前期の活動記録から—」『キリスト教教育論集』第25号、日本キリスト教教育学会、2017年、30頁・前掲熊田論文「北陸地域に女性宣教師の果たした役割」85頁。）
- 5 年次別全国幼稚園数は、以下の表で確認できる。

年次	国立	公立	私立	私立の内 JKU加盟園
1890	1	98	39	(3)
1895	1	161	57	(9)
1900	1	178	61	(17)
1905	1	180	132	(20)
1910	1	216	258	39
1915	2	234	399	81
1920	2	261	465	125
1925	2	347	608	157
1930	2	478	1029	180

備考：『日本キリスト教保育百年史』163頁にある表3-1年次別全国幼稚園数及び、『幼稚園教育百年史』131頁・215頁にある表を参照し、熊田凡子が作成したものである。

- 6 明治初期以降、アメリカ・プロテスタント系の各教派の女性宣教師たちは日本の幼児教育事業の発展に献身的な努力を続け、幼児児童教育の重要性と女性の専門職養成による地位の向上、それに伴う生活及び文化水準の向上を促した。こうして日本各地にキリスト教主義幼稚園や保母養成学校が広がっていく状況の中で、アニー・ハウ (Annie Lyon Howe, 1852-1943) は、幼稚園や保育所及び保育者養成組織の連絡先機関をつくる必要性を感じ、J.K.U (Japan Kindergarten Union)「日本幼稚園連盟」を創ることを提唱した。この組織は、1906 (明治39) 年から、戦争の影響で宣教師たちが帰国することになる1940 (昭和15) 年7月まで活動が続けられた。
- 7 本稿では、キリスト教保育連盟編『ANNUAL REPORT OF THE JAPAN KINDERGARTEN UNION』日本らいぶらり、1985年の第1巻[1907-1910]、第2巻[1911-19114]、第3巻[1915-1918]、第4巻[1919-1922]、第5巻[1923-1927]、第6巻[1928-1939]にある年報 (英文) を使用。また、第7巻 [翻訳・解説・索引] にある年報に関する解説等 (和文) を参照。
- 8 キリスト教保育連盟百年史編纂委員会編『日本キリスト教保育百年史』キリスト教保育連盟、1986年、122頁。
- 9 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに、1979年、34-41頁・204頁。
- 10 倉橋惣三・新庄よし子『日本幼稚園史』臨川書店、1880年、50頁。
- 11 湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』風間書房、2001年、258-259頁。
- 12 同上書、296-297頁、321-327頁。
- 13 前掲書『幼稚園教育百年史』207頁。
- 14 湯川前掲書『日本幼稚園成立史の研究』326-327頁 (下田たづの手記を参照)。
- 15 前掲書『日本キリスト教保育百年史』147頁。聖和保育史刊行委員会編『聖和保育史』聖和大学、1985年、107頁。
- 16 当時のコレラについては男性宣教師の報告に残されている。「Cholera is raging at Osaka and Kyoto now. It may visit in us, but we are hoping to raze soon we have none of the seeds of the disease from last year as do those place.」(J.B.Porter-Kanazawa-, May 25, 1886) (The Presbyterian Historical Society) つまり、宣教師らは、日本の社会における地域の実情や情勢を詳しく捉える視点を持ち、情報を伝えていたということである。
- 17 この実態については、次のように述べられている。「当時、インフルエンザが世界的に大流行し、日本にも侵入し各地に拡がった。人々はスペイン風邪と言って恐れたが、京阪神地方もその猛威にさらされた。12月半ばには頌栄の寄宿舎の学生から患者が出て次々と学生たちが高熱に苦しみ、ミス・ハウも職員たちも流感で倒れている。このため、保母伝習所も幼稚園も12月18日から2月2日まで休校することとなり、1919 (大正8) 年のクリスマス祝会はとりやめとなった。1920 (大正9) 年3月の卒業生10名は、3名の友を流感で失った悲しみを胸にひめて静かに巣だてていった。」(小林恵子『日本の幼児保育につくした宣教師一下巻一』キリスト教新聞社、2009年、106頁。)
- 18 この記録については、前掲熊田・辻論文「米国長老教会宣教師アイリン・ライザーのキリスト教教育観—戦前期の活動記録から—」で詳細に分析している。
- 19 前掲書『日本キリスト教保育百年史』155-156頁。

